

姫は大使で侍



第一幕

空は心が溶けてしまいそうなほど鮮やかなブルーだった。

船の窓からは、深い青色の海ばかりが目に入る。

窓から外を覗いてばかりいるのは、一人の少女である。

黒髪を一つに束ね、巫女服を纏い、腰には立派な刀を携えている。

彼女の自分の足に視線を移した。

鉄でできた足枷がはめられている。

彼女は奴隷なのだ。

ほんの数ヶ月前までは、とある国の姫だったのだが、突然国が攻め込まれ、気がつけばこんな有様である。

幸いなのか、彼女は腕が立つことで殺されることはなく奴隷として重宝された。

振り向くと豪華な赤いソファに腰掛ける男。

詳しくは知らないが、殺人だとか何かの陰謀だとかで有名な人物である。

少女にとって、奴隷というのは屈辱的なものである。

今まで、皇家の人間だったこともあり、尚更。

(こんな奴にこき使われるなんて……。いつか絶対殺してやる)

心のなかで吐き捨てる。

しかし、簡単には逃げ出すこともできない。

何せ彼を護衛しているのは彼女だけではないのだから。

一人が彼を殺そうと武器を向ければ、他の護衛が守る。

「お嬢さん」

ふと、声が聞こえた。

気にせず、外の景色を眺めていたが、肩を叩かれる。

「君だよ、姫？」

「は……？」

振り向くと一人の青年がいた。

黒髪でブルーの瞳、黒い軍服を着た好青年である。

「お前、何をしているんだ！ それは俺の奴隷だぞ！」

先程までソファでふんぞり返っていた男が立ち上がり、青年を怒鳴りつける。

青年はにっこりと笑う。

「それはおかしいな。俺は、この子を迎えに来ただけだ」

少女は意味が分からず、目をぱちくりさせた。

「何を言っている！ それは俺の所有物だぞ！」

「どうする？」

青年は少女に問いかけた。

「ど、どうするって……」

「君は、奴隷はもう嫌なんじゃないか？ 今なら、俺が手助けできるけど」

「それは……」

これは、またとないチャンスだった。

今、この青年に頼れば自由になれるかもしれない。

恐らく、こんなチャンスは二度とないだろう。

「君の意志をみせてくれないかい？ 自由になりたいなら、その刀を抜くんだ」

「……………」

こくりと頷き、少女は刀を抜いた。

迷うことなどなかった。

「お、お前、俺に刃向かってただで済むと——」

瞬間、大きな銃声が鳴り響いた。

青年が構えた銃から銃弾が二つ、放たれて彼の顔をかすめた。

男はさっきまでの態度が嘘のように頭を抱えて震えている。

「行こう」

「いや、その……」

少女は自分の足枷に視線を落とす。

「ああ、そうか」

青年は足枷を外すと、少女の手を引いた。

甲板に出ると、青年は向き直り、太陽のような笑顔を浮かべる。

「俺は、カデル・ケーゼ。見ての通り軍人だぞ？」

「私は……天宮耀葉」

「君は姫だろう？」

耀葉は目をぱちくりさせていたが、やがてむくれっ面になった。

「う、うむ。元、姫だがな。私が姫だと知っているなら、あのことも知っているんだろう？」

「国が壊滅したってやつね。見つめるのに苦労したな」

「……私に何の用なんだ？」

「君は大使さんだからね」

「大使、だと……？」

耀葉は首を傾げた。

「すぐに分かるさ。お、来たかな」

カデルが空を仰いだ。

耀葉も上を見上げた。

小さめの飛行機である。

飛行機のドアが開いたと思うと、ロープが垂らされる。

「さ、行こう。俺の後ろについて来るんだよ？」

「あ……あれに乗るのか？ ど、どうやって登るんだ……」

「そりゃあ、あのロープに捕まってね」

背を向けるカデルの服を掴んで耀葉は、泣きそうになりながら首を左右に振った。

「あ……あんなの無理だ。落ちて、死んだらどうしてくれるんだバカあ」

「無理じゃなくてね、やるんだ」

「う、うう……」

とにかく死に物狂いで飛行機に乗ることに成功し、連れて来られたのは軍部だった。

レンガ造りの建物のなかに足を踏み入れると、壁には武器なんかを立てかけられていたり。

とある部屋に案内されて、放置されていた耀葉は椅子に座ったままというのも疲れてきた。

部屋をぐるりと見回すと、小さめの木製のテーブルや衣装ダンス、引き出しや簡素なベッド、大きな窓がある。

飾り気は全くなく、客人を迎える部屋というより、生活するための部屋のような。

もう二時間ぐらいたつが、誰も来る気配はない。

そのうちに眠気が襲って来て、ベッドに潜り込む。

(別に使ってもいいよな?)

そう思いながら目を閉じた。

その瞬間、ドアが開く音がしたと思うと声が聞こえた。

「ああ、ごめん。今から寝る気だったかい？」

「ノックぐらいしろお！」

耀葉は慌てて起き上がると、怒鳴った。

しかし、それに動じる様子は全くなくカデルは笑顔で口を開く。

「で、話だけどね。君は大使なんだよ」

「いや、だから何の？」

「人と天人を繋ぐ大使だよ」

「天人？」

「空に住む人のことだよ。分かるかい？」

「分かるわけないだろ」

「だろうね」

彼は苦笑いを浮かべる。

そして説明を始める。

「人と天人の仲は今、すごく悪いんだよ。仲が悪いと都合が悪いからさ、その仲を取り持つのが君ってわけ」

「いや、何で私なんだ」

「人と天人のハーフだからさ」

「は？」

目をぱちくりさせた。

そんな話は聞いたことがない。

「今すぐ理解しろとは言わないさ」

「むう……」

耀葉は不満そうに唸る。

何が何だか分からずに頭がグルグルした。

「今日は出かけてみないかい？」

「はあ？」

「せっかく自由になったんだ。楽しもうじゃないか」

カデルの笑顔は、思わずドキッとしてしまいそうなほどだった。

姫は大使で侍

<http://p.booklog.jp/book/38747>

著者：佐倉風弦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/6867777/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38747>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38747>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.